

平成 28 年 8 月 16 日

## 平成 28 年度 FD 推進ワークショップ参加報告

表面科学研究室 原正則

日本私立大学連盟主催の新任教員向け FD 推進ワークショップ「大学教員の職能開発と FD」が、静岡県浜松市の浜松グランドホテルにて開催された。ワークショップは 8 月 2 日、3 日の A 日程と、8 月 4 日、5 日の B 日程の二回に分けて実施され、合計参加者は 107 名（新任教員 93 名、委員 14 名）であり、私は A 日程に参加した。参加大学数は 38 大学であり、関東、中京、関西を中心として、広く全国の大学より新任教員が参加した。

ワークショップは、1 日目には全体の説明、翌日の模擬授業を行うグループ（A 日程では 7 グループ、各グループ新任教員 7 名と委員 1 名）に分かれての自己紹介を行い、その後、模擬授業の説明およびグループ毎の討議を行った後、各自で模擬授業のワークシートの準備を行った。2 日目には各グループでの模擬授業とその討議を行い、最後に全体での報告およびまとめを行って研修を終了した。

全体説明においては、私大連や FD 推進ワークショップの意義、現在大学に求められている教育方針である「新たな未来を築くための大学教育の質的転換」および FD としての職能開発についての説明があり、その後、ワークショップのスケジュールの説明を受けた。

本ワークショップに参加した教員は人文系の教員が多く、私は国際政治、経営、史学、看護、教育、食品安全、家政を専門とされる助教から教授までを含む広い分野の教員の方々と同じグループに所属し、教員となるまでの経歴も各教員で様々であった。しかしながら、グループでの討論においては、どの分野においても授業に関しては同様な課題を抱えており、①学生の集中や注意を途切れさせない講義方法はどのようなものが良いのか、②遅刻や欠席、無断退席への対応をどのようにするか、③教員側の教えた内容と学生側が実際に学習した内容の間のギャップをどのように把握するのか、④学習意欲や知識に差のある学生達に授業を行う場合の授業レベルの設定法などといった課題が挙げられた。

模擬授業説明では、翌日の模擬授業方法（ホワイトボードを用いた 15 分間の講義）やワークシートの作成法、模擬授業に関する役割分担と観察点の説明に加えて、一般的な授業における重要点の説明があり、学生の理解度や満足度には教員の話し方や説明の仕方、態度が使用する教材やメディアよりも大きな影響を与えたとの解説を頂いた。また、講義では出来るだけ肯定的な語句を使用する方がよいとの説明を受けた。その後、各自で授業のワークシートの作成を行ったが、自分の講義予定内容や時間配分だけでなく、その間の学生の作業についても講義計画を作成することは無かったために参考になった。

模擬講義においては、現在担当している「表面界面科学」の一部分の内容について、専門知識が無くても理解可能な内容に変更して講義を行った。模擬講義では、理解しやすいように図を用いた説明を多くしたが、全ての図をその場でホワイトボードに描くために、

板書に多くの時間が必要となり、予定した内容の全てを説明することは出来ず、模擬講義のワークシート作成時の見込みが甘かった。担当している授業においても、講義の最後に時間が足りずに説明不足になることがあったため、今後の講義では時間配分に余裕を持たせる必要があることを実感した。また、反応原理等の解説中に説明の口調が速くなる特徴があるとの指摘を受けたため、今後は注意していきたい。一方、図や実例を用いた説明は内容を理解しやすいとの評価を頂けた。また、授業の導入とまとめで、2回、授業内容の目的を説明したため、学習内容が記憶に残り易くなったとの意見を頂いた。実際の授業では、時間が足りずにまとめが出来ていないことが多かったため、今後の授業では適切なまとめが出来るように準備しておきたい。他の教員の模擬授業においては、講義の科目に合わせて、時事問題を授業導入に示す、導入でキーワードを与えて考えながら授業を受けさせる、選択問題の解答で挙手ではなく拍手での返答を行う、実技や質疑応答、グループディスカッションを行う、図表と講義内容の板書の配置に配慮するなど、各教員が学生に授業への参加を促しつつ、内容の理解が進むように工夫されており参考になった。

模擬授業後のグループ討論では、模擬授業を通しての気づきについて議論し、講義のスピードは早口に成らないようにすること、板書をしっかり行うことで、学生は耳で聴くこととノートを取るという二回作業を行うことになり、学習効果が上がることが指摘された。板書の重要性を改めて実感し、今後の授業時における課題として改善していきたい。特に、説明や板書は授業後半になる程、急ぎ足になりがちなので、授業計画では後半の部分十分に準備しておくことが必要であると感じた。また、学生の集中力は15分程度しか持たず、スライドでの一定のリズムの講義が続くと集中が途切れてしまうため、授業の聴講時間とノートの記述や実技などの作業時間、および質疑などによる考察時間をバランス良く配置して、学生の集中を喚起する必要があるとの結論に達した。他にも、授業で配布するレジュメは（教科書などが無い場合には）しっかりと文章で記述した方がフローチャートのような絵よりも学生が学習すること、グループワークの人数や学生の役割分配の方法では人数は最大6人程度にし、全員に役割と発表機会を与えることや学生の希望に応じて人数を調整すること、質疑時の選択問題の解答方法として挙手よりも拍手や机を軽く叩くなどの方が返答する学生が多いこと、学生からの授業に対するフィードバックの取得方法として課題レポートの最後に授業に関する意見を入れてもらうなどの方法があることなどについて話し合いを行った。また、個々の授業内容とは異なるが、ノートの取り方の指導が必要かについても議論した。

最後に、参加者全員での振り返りを行い、FD推進ワークショップのまとめとなったが、豊田工業大学では授業態度や試験・課題の成績の評価法、学生へのサポートなどについて、大学全体で一定の指針を持っているために、教員、学生ともに一貫して対応できるため良いのではないかと感じた。

最後に、このようなワークショップへの参加の機会を用意していただいた皆様に感謝の気持ちを示して、報告書のまとめとさせていただきます。ありがとうございました。

平成 28 年 8 月 31 日

## FD 推進ワークショップ参加報告

固体力学研究室 椎原良典

日本私立大学連盟主催の平成 28 年度 FD 推進ワークショップ（新任教員向け）に参加したためその内容と参加者個人が得た成果、所感について報告する。

[ワークショップの概要と目的] 当該ワークショップは静岡県浜松市の浜松グランドホテルを会場として 2 日間の合宿形式により実施された。その日程は 8 月 2 日～3 日（A 日程）と 8 月 4 日～5 日（B 日程）の 2 日程からなり、報告者は B 日程に参加した。両日程での参加者の合計は 93 人であり、文理を問わない幅広い学術分野、また、様々な規模の大学からの新任専任教員（平均年令 38 歳）の参加があった。ワークショップの目的は、社会からの要請としての”大学教育の質的転換”を目標に据えた上で、(1) 大学教員の 4 つの職能（教育・研究、社会貢献・管理運営、特に教育について）を確認すること、(2) 参加者の協働を通してファカルティデベロップメント（以下、FD）に関する見識ある実践的理解を共有すること、の 2 点である。これらの目的達成に向けて、実施されたプログラムは、(1) ワークショップ運営委員長（同志社大学、圓月勝博教授）による FD・職能開発に関するレクチャー、(2) FD の一部としての教授法向上を目的とした模擬授業とその相互評価、の 2 項目である。2 日間の日程の大半は項目(2)に費やされた。

[内容 1：FD・職能開発に関するレクチャー] ワークショップは同志社大学、圓月勝博教授による全体説明と FD に関するレクチャー（計 30 分）から開始された。まず、社会の要請としての大学教育の質的転換の必要性が提起された。その質的転換を実現する上での課題の 1 つとして、”「プログラムとしての学士課程教育」という概念の定着」という項目が提示され、そのプログラムがディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーという 3 つのポリシーの階層構造からなることが解説された。これらのポリシーは各大学の理念と教育目標に従い宣言されるものである。次に、大学教員に求められる 4 つの職能開発の 1 つとしての FD の定義「教育に関する職能開発：教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」が示された。上述の 3 つのポリシーはこの FD で達成すべき目標を定義するものである。その目標を全体として達成することを目指して個々のカリキュラムが構築され、日々の講義が設計される。以上から、大学教育の質的転換を実現するための最小要素の 1 つは授業の改善であり、それをもって FD における授業の重要性、その重要な要素としての教授法を涵養することが重要である、ということが結論として示された。

[内容 2：教授法の向上を目的とした模擬授業とその相互評価] その後の時間は模擬講義とその準備、相互評価に当てられた。このパートでは、参加者が 7 名程度の小グループに分かれ、各々が 15 分の模擬講義をその他の参加者を学生に見立て実施し、その後の 15 分でその講義での授業手法について建設的な意見交換を行う。まずは、ワークショップ運営委員である法政大学、川上忠重教授から模擬授業の概要と目的について全体に向けた解説があった。その後の小グループごとの顔合わせを経て、個々の宿泊部屋に戻り模擬講義を設計する。ここまでが初日の内容であり、本体としての模擬講義は翌日朝から実施された。各小グループでの模擬講義、それに関する意見交換を経て再び全体での会議形式に戻り、パネルディスカッション形式を通じた全体レビューが行われた。そこでは、各小グループの作業で得られた授業の改善点、課題、気づき等が各グループの代表により報告され、その内容が全体討議された。以上が 2 日間のワークショップの内容である。

以下では、運営委員会から提出が求められている参加者レポートの内容に即して報告を行う。

[報告者が参加前に考えていたこと] まず、報告者自身のFDに関する認識がきわめて曖昧であったことを告白しなくてはならない。授業の工夫を通じて学生の興味関心を惹き、授業参加への意欲向上を通じて講義の内容への理解を深めさせる、といった程度の認識であった。この時点での報告者の講義経験は半期の非常勤講師と数回の代講程度であったが、これらの少ない経験ながらに事前に持っていた問題意識としては、(1) 進度、内容等の授業の難易度をいかに設定すべきか、(2) 履修者の多い授業における学生の私語、スマートフォン操作等のサボタージュ行為にいかに対応すべきか、(3) アクティブ・ラーニングとは何か、(4) 学生の授業参加意欲をいかに惹起できるか、(4) 板書かパワーポイントのどちらを用いるべきか、といった項目がある。これらの問題に何かしらの答え、もしくはヒントが得られるものと期待していた。

[ワークショップ期間中の気づきやプログラムの感想] 第一に、前述のワークショップへの期待のほとんどについて満たされることはなかった。本ワークショップの主眼は、授業における教員と学生のコミュニケーションに重点を置いた、いわば卑近的な意味での教授法の向上にあったためである。一方で、FDに関するレクチャーを通じその全体像を明確に把握したことで、FD達成という目標の遠大さを理解することができた。その遠大さからすれば、2日間でカバーしうる内容はごく一部であり、FDの核となる個々人の教授法の向上を主題とするのはきわめて妥当と考えるようになった。

第二に、模擬講義を通じた教授法向上の試みを通じて幾つかの有用な気づきがあった。それらはまず、自らの模擬講義を通じて小グループ参加の諸先生方から頂いたご指摘から得られた。具体的には、雑談の重要性、学生をよく観察しながら間を取ることの必要性、理解を深めるための板書の工夫等である。特に、講義印象をよくするために表情を工夫せよといったご指摘には不意を突かれた。いずれも、このような機会でなくては得難い貴重なアドバイスであった。次に、諸先生方の模擬講義を学生の立場で拝聴することで、教授法の一部について理解が進んだ。全く分野の異なる先生方の模擬講義であるためかえって講義の内容に意識が向くことなく、発声や学生に対するアイコンタクト、工夫された板書、学生の意識をこちらに向けてるための発問方法などに意識が集中した。これらの気づきを通じて、ものを伝えるためのコミュニケーション技術が教授法の核心であることを理解した。

上記2点をまとめるに、FDの核が教授法であること、模擬試験がその実践的理解を深める有用な具手段であることを理解できたため、本プログラムに参加できたことは報告者にとり有益であった。

[ワークショップ参加後の問題意識の変化や今後取り組んでみたいこと] 前述した個々の問題意識については参加の前後で変化することは無かった。ただし、コミュニケーション法としてのいわば狭義の教授法の重要性を認識するに至り、それを職能として日々開発しなくてはならない、という重要な問題意識を新たに持つことができた。今後は模擬試験での経験を思い起こしながら、可能なかぎり自らの講義を客観視する姿勢を心がけたい。また、FDの全体像を理解できたことも大きな収穫であった。学んだFDの定義、目的、FDとディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの関係に関する理解は、今後のファカルティの一員として教育・教務活動に参加する中で個人的に判断の軸となる重要な指針となっていくものと期待している。

[さいごに] 本ワークショップのプログラムで得られた知見が有益であったことは上述の通りだが、それ以外でも、大学も分野も異なる諸先生方との交流(懇親会等)の中で得た知見もまた有益であった。1つ印象的であったことは、FDに向けた努力すらファカルティ内の意思統一が為されていないせいで成立しない、という不満をお持ちの先生が少なからずいらしたことである。これは(少ない奉職期間ではあるが)本学の状況には必ずしも当てはまらないように感じており、本学に籍を置くことの幸運を認識するに至ったことを付記したい。

以上